

言語活動再考

今井裕之

(関西大学)

1. 英語授業における言語活動

広義には、授業は全て言語活動である。学習指導要領で定義される「言語活動」に限ってみても、各教科を貫く重要な教育改善の視点とされ、総則の第4には「各教科等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること。」と述べられている。生徒の「思考力・判断力・表現力」を育成する手段として、活用型学習を行い「言語活動」を充実させるのである。

言語活動指導の中核を担う国語科では、4技能に渡って「記録、要約、説明、論述」させる指導案を例示している(文部科学省、2011)。例えば、調べたことに基づいて説明や発表をする事例として、「おすすめ観光コースを提案する」単元が紹介されているが、これは英語の授業実践でも頻繁に取り上げられるテーマである。教科を横断して言語活動の充実に取り組まれていることがうかがわれる。

また、言語活動では、「知的活動(論理や思考)」だけでなく「コミュニケーションや感性・情緒」も重視され、その育成が目標に掲げられている点も忘れてはいけない。言語は論理的思考とともに豊かな感性の基盤でもある。

2. NEW CROWN の「言語活動」

外国語科で言語活動を行う際には、活用型学習を行う前に、習得型学習、つまり基本的な知識と技能の獲得を、他教科以上に徹底する必要があるのは言

うまでもない。NEW CROWN では、4技能の「習得」と「活用」の言語活動指導は、おおそ以下のように配置されている。

表 NEW CROWN のレッスン構成と「習得」「活用」

	習得型	活用型
読むこと	各パートの本文	USE Read
聞くこと 話すこと 書くこと	各パートの Drill, Practice (Listen, Speak, Write)	USE Listen USE Speak USE Write
統合		USE Mini-project

このような構成で、4技能にわたって、知識や技能の「習得」と、それを思考・判断・表現に「活用」する、狭義の言語活動を行う。外国語科で「言語活動」と言うときは、Drill, Practice での習得型活動も含めることが多い。他教科の教員と話していて、「英語の言語活動は言語活動ではない」「英語は暗記科目だから活用は関係ない」などと責められることがもしあれば、おそらくドリル偏重の誤った授業イメージのせいである。外国語科の言語活動は確かに特殊ではあるが、他教科と同じく「活用」を目指す点では何ら変わることはないのである。

この特集で議論する言語活動も、習得と活用の両方を含んでいる。榎葉先生は、Drill, Practice を用いた習得活動において、表現力につながる指導を行なう工夫やポイントについて、佐藤先生は、USE での活用活動におけるインプットの重要性と、その際に教師がリキャストによりフィードバックを与える意義を、工藤先生は、impromptu speech の指導を、「言いたいこと(What)」と「英語でどう

言うか(How)」の両面から行う方法を、それぞれ議論している。

中学校の英語教科書は、このように4技能全てについて、知識・技能の習得と、その活用による思考力(論理だけでなく感性や情緒も)・判断力・表現力の育成を一手に引き受けている点で、高等学校の教科書には見られないオールマイティさを備えている。特にNEW CROWNは、「習得(GET)」と「活用(USE)」を中心に、言語活動の段階的指導展開をわかりやすく示していると言えるだろう。

3. 「言語活動」に足りないもの

小中高での授業研究会に参加する機会が多いのだが、同様の立場にある研究者たちが、近年、文型ドリルやパターンプラクティスが足りない指摘していた。ちょっと特別な言語活動中心の「研究授業」を観ることが多い点を差し引いても、単語発音練習から、文型ドリルを飛ばして、本文音読を経由して言語活動(Practice)に移る授業展開が増えていないだろうか? 本来、音読は、文の構造に意識を向けるための活動ではないので、文型ドリルの代わりにはならない。一方、Practiceは、意味伝達や自己表現、発話行為を目指すため、その前段階で英文の文法構造と意味の結びつきを意識させる文型ドリル活動は不可欠である。

足りないものの2つめは、4技能の統合による自然な文脈づくりである。人はいきなり話したり、書いたりすることはあまりない。多くの場合、他者の言葉に応じることで発話し、その発話がまた次の人の発言をうながし、言葉は紡がれるものだ。「それは当然だろう」と読者であるあなたが思ったとしたら、その「それ」は私が書いた文であり、私たちは他者の言葉を借りて引き取りながら話したり、書いたりする。そのような対話的言語使用の自然さを言語活動(活用)に取り込むことは実は難しい。それが難くできるとしたら、即興的に話したり書いたりできる。それができないから、「モデル文」が提示され、生徒はモデル文の()に自分の言いたいことを挿入して表現活動練習を行うのだが、このレベルから脱却して、自由度の高い言語活動に移行し、生徒たちが自分たちの文脈をつくれるようにど

う指導すればよいのだろうか。

具体的な提案は後続の記事に譲るが、自分の文脈づくり(自由度のある会話づくり)のポイントをあげておきたい。それは「相手の気持ちや意図を想像すること」と「発話者の気持ちを想像すること」である。論理や思考だけでなく、感性や情緒も重視する文科省の方針については前述したが、コミュニケーション能力育成の面からも、自分と相手の発話が「どんな気持ちでの発話か」を想像すること、発話の意図を読むことは、言語で交換される意味情報以上に大切である。対話的なコミュニケーション力を評価するリスニングテスト問題を例に考えてみよう。

W: The weather has been changeable.

M: Yes. It was warm yesterday, but we had snow this morning.

W: Yeah, I wonder when we can send our winter clothes to the cleaner's.

(平成24年度大学入試センター試験英語リスニング第2問、問11)

会話の続きを想像する問題で、選択肢がなければ答えはたくさん考えられる。正解はMaybe we should wait for a while. だが、実はWさん(女性)は、Mさん(男性)にクリーニング屋に行ってほしいのかもしれない。主語がweだから、2人は夫婦だろう。そうだとしたらMさんは鈍感だなあ、といった想像をうながす指導をしたい。NEW CROWNのWe're Talkingは、そのような発話者の意図や気持ちを読み合い、即興的会話に発展させることが可能な教材である。

会話のモデル文の多い中学校英語教科書が、高等学校と異なり、KenやKumiなどの登場人物が3年間一貫して決まっているのは、発話者の意図を掴みやすく、気持ちを理解しやすくする仕掛けとも言える。英語教科書の登場人物には、本文を通して作られるそれぞれの個性が少なからずある。「Kenがこんなこと言うはずがない」などと生徒が発言するようになれば、発話者の意図を意識できている、テキストが生きた言葉になっていると言えるだろう。そのように相手の立場や発話者としての意図を

想像することができれば、次のステップは、他者の発話の意図を受容し肯定的に発展させる、即興演劇の精神 “Yes, and …” で自分たちの文脈づくりをさせることができる。小学校外国語活動の教材 *Hi, friends!* の桃太郎のレッスンに即興劇を取り入れた実践 (Fujiwara, Sakazume and Imai, 2012) では、鬼が島に行く決意をした桃太郎と、それを引き止めようとするおばあさんの会話を即興で行った(セリフは固定)が、普段は話したり遊んだりしない2人が、役になりきって発話し、演じ合う場面が観察された。

もう一点、大切にしたいことは、「思考や感性を育てる手法の工夫と時間の確保」である。工藤先生が述べる通り、英語科における言語活動は、「話す内容(What)」と「英語でどう言うか(How)」を統合することであるが、英語の授業ではWhatのために割く時間がまだまだ少ないのではないか。Howの「習得」のための指導の工夫に対し、Whatを表現する活用のための支援の工夫は、まだ研究の余地があると思う。今日、協同学習、プロセス・ライティングなど思考や感性を刺激しWhatを導く指導方法の開発は盛んになっているし、この点においては、小学校外国語活動の実践から学ぶことも多い。“Can you play soccer?”と尋ねられて、「誘われている」と解釈した小学生たちに驚かされたことがあるが、そのようなコミュニケーションに向かう構えを、私たちはその後の英語学習でも生かし続けたい。そのためにも、思考や感性を刺激する工夫と時間、それを英語で表現するための支援があれば、生徒たちは私たち教師の想像を超えてくれるにちがいない。

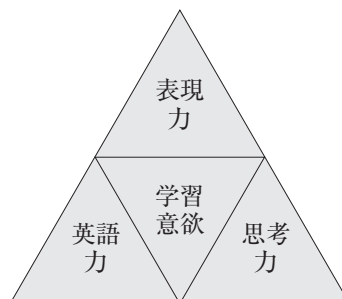
言語活動に足りないものとして、(1) 文型ドリルの不足、(2) 自分の文脈をつくるための発話者の意図の想像、(3) 思考や感性を刺激する工夫と時間の確保、の3点をあげた。今回の学習指導要領の改訂の柱のひとつになっている「言語活動」の意義を、他教科の場合と比較しながら、外国語科の授業における言語活動の独自性と共通性を議論してきた。これまでの議論から、外国語科では、思考・判断(日本語でできる高度な思考)と、表現(限られた英語知識)の間に埋め難い深い溝があり、「習得」の言語活動と「活用」の言語活動がどうしても乖離してし

まうことが、授業の難しさを生み出していることがあらためて明らかになった。

それでも、私たちは、英語の授業だからできる、思考力(感性、情緒)、判断力、表現力の育成を工夫実践していくべきであろう。

4. 「言語活動」という山に登るルート

言語活動を再考するなかで、学習指導要領の提示する概念群(思考(感性、情緒)、判断、表現、習得、活用など)の関係を山にたとえて図式化してみたい。



英語授業は、英語力を磨くことで表現力を身につけようとする、左側斜面からの登山ルートが一般的であり、これまでも今後も王道であり続けるだろう。「言語活動」を、文型パターンの応用ではなく、知的活動(論理や思考)と感性・情緒を表現しようとする活動であると考え今回の学習指導要領によって、「思考力」から「表現力」にアプローチする「活用型学習」の右側斜面からのルートの意義が強調された。これまでの言語活動をあえて批判的に見るとすると、左側斜面のルートから登ろうとするあまり、右側斜面からのアプローチが足りず、思考する主体としての学習者が不在となっていたのかもしれない。また、表現力を支えるはずの、英語力と思考力とのバランスと関係づけが悪く、表現力の育成が不十分で、学習者にとってストレスフルな授業になっていたかもしれない。両斜面からの登山をバランスよく行うには、教材の英文が多すぎる／難しすぎると、左斜面を険しくし過ぎることになるだろうし、思考をほとんど伴わない形だけの表現活動をしてしまうと、右斜面がなくなってしまいうため、言語の形をなぞるだけの、表現力育成に役に立たない活動になってしまうだろう。「3つの力のバランスよい育

成のために、授業デザインを工夫するにはどうすればよいのだろうか？」という問いへの有力な答えのいくつかが、次ページからの記事に書かれている。

この図について、もう一点説明しておきたい。表現力、英語力、思考力（感性、情緒）の中核には、学習意欲があると考えられる。学習意欲は、英語力伸長だけに対してではなく、表現の喜びや思考の深化を実感して持つものでもある。英語力、思考力、表現力を伸ばす活動がそれぞれに、学習者の英語学習意欲を支えていると言える。2年生の「将来の夢」や、3年生の「私の尊敬する人」のレッスンは、まさにその最たるものであろう。平成24年度の姫路市の白鷺小中学校の研究大会で、前年に転任された先生について「英語だけでなく、生き方を教えてくれた〇〇先生のような人になりたい」とスピーチした生徒がいた。前任校の研究大会ということで、生徒の成長を確かめにその先生も教室にやってきた。とても深い感動だった。滋賀県の竜王中学校でも、グループ活動で「将来の夢」のスピーチ活動をさせたところ、生徒たちが真摯に、楽しそうに語る姿に感銘を受けた先生が、「学年合同でやるか？」と持ちかけたところ、立候補者が続出し、英語の先生方みなで協力して、スピーチ大会に発展した。どちらの授業にも参加して実感したのは、聞き手への想いを込めたスピーチが、聞き手を動かして、さらに次のコミュニケーションを生んだことへの感動だった。

コミュニケーションの育成は、まずは相手を肯定的に受け止め、それを表現できる聞き手を育てることではないかと思う。そうすれば、発表の機会ごとに生徒たちは、受け止められる安心を知り、聴衆を信じるようになる。次に、話し手が「聞き手意識」を持って、聞いてほしいと思える内容と話し方で臨むことである。そうすれば、聞き手の心と体は自然と動くかもしれない。

5. 「言語活動」Performing your new self

ある小学校の卒業文集を読んでいたら、児童の「成功も失敗も次の前進のための一歩」という一言が目にとまった。やはり学校は成功と同じくらい失敗をすところなのだとあらためて思う。たくさん

「失敗」の中には乗り越えられなかった経験もあったかもしれない。外国語活動の授業での「失敗」が少ないことを祈るばかりだ。現実には、外国語学習は「わからない」「できない」がスタート地点だから、失敗なくして成長なしとも言えるが、そんな人生観で生き抜くのは大変だ。

言語活動での「失敗」を失敗でなくする方法が2つある。1つは、授業の場を、今の自分より少しだけ「背のび」をして、なりたいたい自分を演じようとするのである。まだなりきれないけれど、そうなりたいたい自分の将来の姿を生徒が演じられるよう、先生が支援することの大切さを、ヴィゴツキー心理学という発達の再近接領域 (Zone of Proximal Development=ZPD) は教えてくれる。一歩先の成長を演じているのだから、できなかったとしてもそれは失敗ではない。

もう1つは、言語活動の相手が「肯定的に受け止める」ことである。即興演劇 (improvisation) の小学校英語教育への応用を研究する兵庫教育大学の現職院生、藤原由香里さんの実践から Present for you を紹介したい。

A: This is a present for you. Here you are.
 B: Thank you. (1)
 A: (2)

まずAが最初のセリフを言いながらジェスチャーでプレゼントを渡す。Bは、お礼を言いながらその場でAのジェスチャーから自由に発想し、プレゼントが何かを決め、(1)でOh, chocolate! などと言いつつ演技をする。それを聞いたAは、(2)でI made it for you! などとコメントを返す。シンプルな活動だが、一度試してみたい。

【参考文献】
 大学入試センター (2012). 『平成24年度大学入試センター試験 外国語 (英語) リスニング試験』
 Fujiwara, Y., Sakazume, Y. & Imai, H. (2012). Improvisation in elementary school EFL classrooms in Japan: The centrality of emotion in classroom discourse. Paper presented at performing the world 2012, East Side Institute: New York
 文部科学省 (2011). 『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～【中学校版】』